

## Medi-Way 医療通訳者紹介 Vol.20 スペイン語担当 田中さん

### ◆なぜ医療通訳者になった？

元々医療に興味があり、10年以上前に医療通訳養成講座を受講したのですが、血が苦手でした…。しかし、国外の治安の悪い地域に住んでいた時、目を覆いたくなるような新聞の一面を日々見慣れるうち、どうやら耐性がついたみたいです。その頃に病気や事故などの同行通訳の経験を積んだことも、この道に進むきっかけとなりました。

### ◆今まで医療通訳に携わってきて一番嬉しかったことは？

言葉が通じない状況での体調不良は、不安が倍増する瞬間だと思います。診察後に感謝の言葉を頂いたり、安心された様子をお見受けしたりした時、微力ながらお役に立てて良かったと心から嬉しく思います。個人的な話ですが、子どもの頃に国境なき医師団のボーダーレスな活動に憧れていた時期がありました。形は違いますが、医療分野に携われていることも嬉しいことの一つです。

### ◆より良い通訳をするために心掛けていることは？

医療知識の蓄積と通訳者としての研鑽です。勉強の気晴らしに医療ドラマやドキュメンタリーを見ては、憧れの先輩通訳者の真似をして訳出しています。学習の成果を試すかのように症状から考えられる病名や治療法を予測すると、医療ドラマもミステリーさながらで、楽しく勉強できます。と、真面目なことも書きましたが、よく食べよく寝て運動することを一番心掛けているかもしれません。顧問医師の連先生を始め、医師おすすめの健康法も真似ています。



### 「お陰様で2周年を迎えました」

「Medi-Way 医療通訳だより」は創刊して2年を迎えました。本当に感謝です。

当時の創刊号では「医療通訳は、言葉と文化の違いを橋渡し」と掲載していました。先日、あるご縁から東京都内の公立高校で外国につながるある高校3年生14名に「多様な社会に生きる～外国につながるのある人材に期待すること～」と題してお話しをする機会がありました。外国にルーツを持つ生徒さんに向けて、通訳や翻訳という仕事について、それを目指すにはどうしたらよいのかなど、できる限りのやさしい日本語でお伝えしました。高校3年生で進路について考えている時期で、真剣に目を見て傾聴してくれました。

最後に「夢」を持ち「日本と世界のかけ橋」になってください！とお話しをして授業を終えました。後日、生徒さんが書かれた日本語メッセージが届きました。「医療通訳は難しい、今日の話聞いて自分の進路に少しヒントになりました」、「翻訳は偉大な職業だ」など熱い言葉がありました。これからの担う世代の外国人に接することができたことは、「かけ橋」のお手伝いになることだと改めて感じた出来事でした。

センター長

## 今月のピックアップ

### 「日焼け or 美白？」

暑い夏、日本では日焼け止めに始まって日傘やアームカバーで「絶対焼かない！」が当たり前になっていますよね。さて、他の国の感覚はどうなのでしょう。通訳者たちに聞いてみると、やはり「美白のアジア」とそれ以外の国で大きく異なるようです。

「色の白いは七難隠す」とは日本の諺ですが、中国にも「一白遮面丑（白い肌がブサイクを隠す）」という言葉があり、最近流行りのモテる女性3条件は「白富美（色白・お金持ち・美人）」のようです。ベトナムでは、特に若い人たちは日焼けを気にしていて、バイクに乗る時は忍者のように完全防備で肌を守るそう。またビーチでは早朝にすでに海水浴を終えた人たちを多く見かけるのですが、これも日焼けを避けるためでしょうか。

一方、南米ブラジルや太陽の国スペインでは、どちらかということになり焼けた肌がカッコいいとされ、むしろ日焼け用オイルや日光浴が推奨されるようです。「健康的」がキーワードというのも納得ですね。それでも紫外線対策に関しては、医学の発達で「非メラノーマ皮膚がん」の発生がブラジルで多いことが知られ、日焼け止めを使う人も増えてきているみたいです。

アメリカ本土やオーストラリアなどでは、やはり重点は紫外線対策で、目を守るためにサングラスの着用を義務付けたり、購入に補助が出たりするところもあるようです。「No Hat, No Play（帽子をかぶらないと外で遊んではいけない）」子どもたちにはちょっと窮屈な標語もあって、徹底ぶりが伝わってきますね。

